



接続詞：that



接続詞：that：解説

従属接続詞thatを文の前に置くと、その文を「<主語>が<動詞>すること」の意の名詞節に変換することができる（例：「He likes math. (彼は数学が好きだ。)」→「... that he likes math (彼が数学を好きであること...)」）。これを**that節**と言い、他の文の中で目的語や主語または補語として用いることができる（例：「I know that he likes math (彼が数学を好きであること...を私は知っている)」）。

① SVO文の目的語で用いる場合

knowやsayなどの動詞は、that節を**SVO文の目的語**にとることができる。

❖ know that <主語> <動詞> : <主語>が<動詞>することを、知っている。	
I know ^{フエイバリット} <u>his favorite subject</u> . <small>favorite ~好きな~ (限定用法の形容詞)。</small>	私は、彼の好きな教科を、知っている。
His favorite subject is math.	彼の好きな教科は、数学です。
I know <u>that his favorite subject is math</u> .	私は、彼の好きな教科が数学であることを、知っている。
❖ say that <主語> <動詞> : <主語>が<動詞>すると、言う。	
He likes math. <small>like=～が好きだ、～を好む (動詞)。</small>	彼は数学が好きです。
I know <u>that he likes math</u> .	私は、彼が数学を好きであることを、知っている。
I know <u>he likes math</u> . <small>接続詞thatを省略。</small>	
Tom says <u>that he is a doctor</u> .	トムは、自分は医者であると、言っている。
Tom says <u>he is a doctor</u> .	

「I know that he likes math」のような文を**複文**¹と言い、「I know...」の部分**主節**²、「that he likes math」の部分**従属節**³と言う。この文の場合、that節が従属節になっている。

目的語になるthat節のthatは**省略することができる**（例：「that he likes math」→「he likes math」）。

主節の主語で固有名詞を用いて（例：「Tom says...」）それにthat節内でも再び言及する場合は、代名詞を用いる（例：「that he is...」）。

¹複文：主語と述語からなる文で、さらにその構成部分に主語・述語の関係が認められるような文。「三重は雨の多い県だ」など。

²主節：複文の中にある、それだけで独立した文になれる節。「三重は雨の多い県だ」の「三重は…県だ」など。

³従属節：複文の中にある、主節に対して、主格・述格・連体修飾格・連用修飾格・独立格に立つ節。「三重は雨の多い県だ」の「雨の多い…」の部分（連体修飾格）や、「彼女が優しいのは有名な話だ」の「彼女が優しいのは」の部分（主格）など。

2 時制の一致

Tom says that he is a doctor.	トムは、自分は医者 <u>であると</u> 、 <u>言う</u> 。
Tom said that he was a doctor. <small>☞時制の一致により従属節内ではisではなくwasを用いる。</small>	トムは、自分は医者 <u>であると</u> 、 <u>言った</u> 。
Tom says that he can go.	トムは、彼が行くことができると、 <u>言っている</u> 。
Tom said that he could go. <small>☞時制の一致により従属節内ではcanではなくcouldを用いる。</small>	トムは、彼が行くことができると、 <u>言った</u> 。

基本、主節の動詞が過去形の場合、従属節（that節）の中の動詞もそれに合わせて過去形にする。これを**時制の一致**という。

なお、時制の一致は日本語においては厳密に適用されないので、上の例文であれば、一般に「トムは、自分は医者であったと、言った。」とはせずに「トムは、自分は医者であると、言った。」とする。

He <u>says</u> that he <u>heard</u> it from you.	彼は、（彼が）君からそのことを聞いたと、 <u>言っています</u> 。
--	--------------------------------------

逆に従属節（that節）の中の動詞が過去形の場合は、主節の動詞は別にそれに合わせて過去形にする必要はない。

Do you know <u>the name of this plant</u> ?	この植物の名前を知っていますか？
Did you know that Tom <u>is a doctor now</u> ?	君は、トムが <u>今</u> 医者だって、知ってた？
Did you know at the time that Tom <u>was a doctor</u> ? <small>☞at the time=その時に。</small>	君は、トムが医者だったことを、 その時に 知っていましたか？

「Do you know...? (…を知っていますか?)」が自分が知らない知識や情報を相手に尋ねる際に用いるのに対し、「Did you know...? (…だと知っていましたか?)」は自分が既に知っていることを相手も今知っているか確認する際に用いる。

「Did you know...?」は、文字通りそれを過去のある時点において知っていたかたず尋ねるのにも用いることができる。

他の**時制の一致**の例外に関しては、別プリント参照。

3 SVOO文の直接目的語で用いる場合

❖ tell <人> that <主語> <動詞> : <人>に、<主語>が<動詞>すると、言う。

❖ アドヴァイズ advise <人> that <主語> <動詞> : <人>に、<主語>が<動詞>すると、助言する。

I told Tom that I must go.

※従属節内の助動詞mustは主節が過去時制でもそのまま使用可能。

私は、トムに、私は行かねばならないと、言った。

Tom advised me that I had better arrive at the examination room very early.

※had better <動>=<動>したほうがいい（助動詞）。

トムは、私に、その試験会場の部屋にかなり早く着くべきだと、助言した。

tellやadviseなどの動詞は、that節をSVOO文の直接目的語にとることができる。